



石神遺跡第1 3次調査(飛鳥藤原第110次)現地説明会資料

奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部
2000年12月23日

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字東六反田 264・265
調査面積：約 440 m²
調査期間：2000年10月16日に開始、現在継続中

はじめに

1981年からはじまった石神遺跡の調査は、今回で第13回目となった。前回までの調査で、7世紀中頃から8世紀にかけての各時期にわたる遺構を検出し、この時代の重要な遺跡であることがわかってきた。特に7世紀中頃の遺構のまとまりが良く、これについては斉明朝の饗宴の場としての性格が想定されている。

今回の調査区は、第9次調査区(1990年度調査)の北に接する水田で、石神遺跡のうちで最も北に位置する。このため石神遺跡の北部地域のあり方を明らかにすることを目的に調査を開始した。

調査の概要

本調査は、東西・南北が約21mの調査区で実施した。調査面積は約440m²である。第1次調査からの調査総面積は11,940m²に達する。

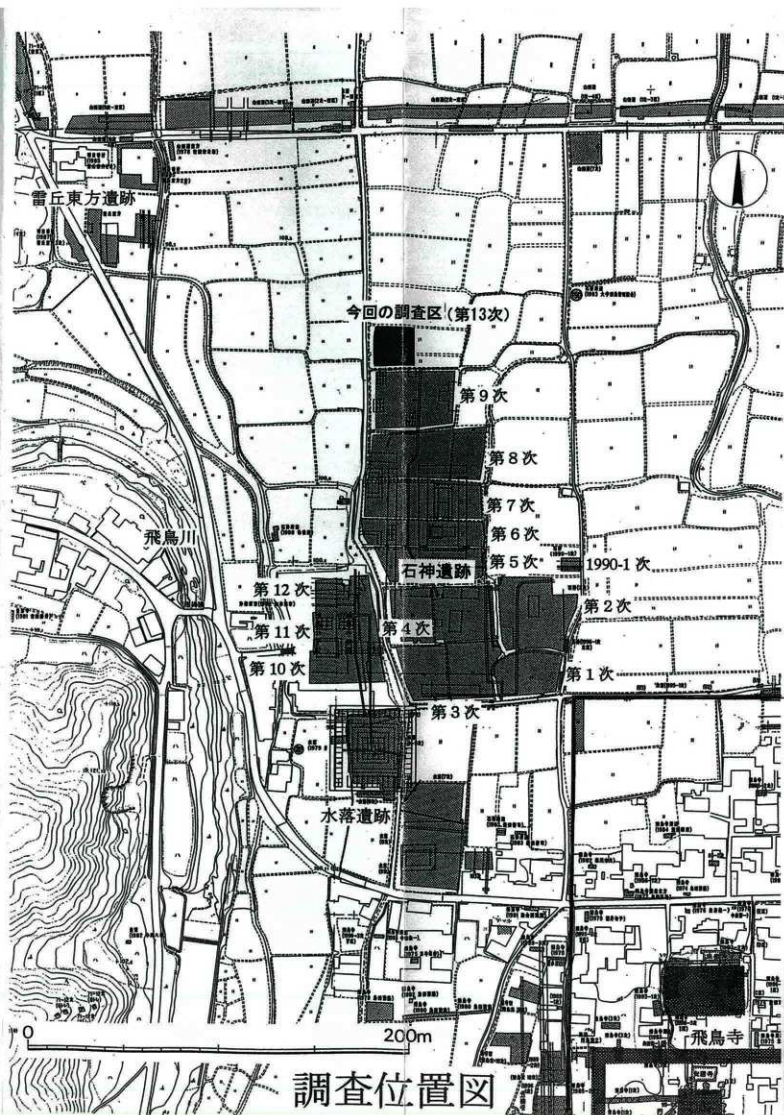
この遺跡の地形は南東から北西へ傾斜しており、北西へいくにしたがって層層にもわたる整地土があり、古代の構築物はこれらの大規模な整地の上に営まれている。今回の遺構もほとんどがこれらの整地土上面で検出した。整地土は層層にもわたり、場所によって土質や厚さが異なる上、土坑の存在も加わって、検出面はかなり複雑な状況を示している。

遺構

検出した主な遺構は、7世紀前半以前と7世紀中頃から後半にかけてのもので、大きくA期以前、A期-7世紀中頃・斉明朝、B期-7世紀後半・天武期の3時期に分けることができる。

A期以前：斜行石組溝が1条ある。

溝1が、調査区南東隅から北西隅にかけて等高線に直交して直線状に構築されている。底には小礫を敷き、側石を一段立て並べている。溝幅は調査区南端で15cm・北端で27cmと次第に広くなり、南東から北西に水が流れる。



調査位置図

< A期 > 遺構の重複関係から、これまでの調査結果と同様に小期に細分される。

A-1・2期：東西石組溝2条、東西掘立柱塀1条、それに石詰め暗渠がある。

調査区北端の溝2は、下幅約2.0m・残存上幅約2.4m・残存高約0.7mで、人頭大の石を5段以上積み上げ、底に拳大の石を敷いた東西石組溝である。溝幅の規模は、これまで石神遺跡の調査でみつかった石組溝中で最大である。水は西に流れる。溝2の南肩から南約11mの位置に、溝4がある。溝4は、本来石で護岸した石組溝であったが、掘え付けた石のほとんどが抜き去られている。据付掘形幅は約1.5m、残存した側石から推定できる内法幅は約0.7mである。

溝2と溝4の中央やや南寄り、すなわち溝2の南肩から南約6.9mの位置に、東西塀2がある。塀2は、柱根1本（残存径21cm）と掘形2つを除けば、他はすべて新しい時期の整地土で覆われている。柱間は2.1m等間で、調査区内には11間分があると推定される。なお、塀によって東西に黄色山土が分布するので、塀の周囲は本来は基壇状を呈していた可能性がある。

塀2と溝2・4が石神遺跡の北辺を構成したとみられる。

調査区南西隅の石詰め暗渠は、整地土中に掘えた排水施設である。

A-3期：東西石組溝2条、東西掘立柱塀1条、掘立柱建物2棟、石敷がある。

調査区北端の溝2は、この時期も継続する。溝3は、底に平石を敷き、側石を備えた東西石組溝で、内法幅は0.65mである。規模と石の残存状況とから、溝4を北に8m移しかえて溝3をつくり、その際に溝4の石材を利用したと推定される。

溝2と溝3の間中央やや南寄り、すなわち溝2の南肩から南約2.5mの位置に東西掘立柱塀1がある。柱はどれも抜き取られている。褐色土と黄色山土を用いた整地土が、柱掘形の上面を版築状に水平に覆っており、かつ柱抜き取穴がこの整地層を壊しているので、塀1のある溝2と溝3の間3.6mは、本来は基壇状に高まっていた可能性がある。この塀の柱穴は、塀2で判明している柱穴のそれぞれ真北約4.6mに位置し、2.1m等間、調査区内で11間分である。

建物2棟はいずれも塀1の南側にある。まず建物2は、調査区中央西端にある、桁行3間以上（柱間1.7m）・梁行3間（柱間1.7m）の総柱建物である。西側は調査区外にある。柱抜き取穴には焼土を含む。また調査区南東隅において、南北棟建物3の北西隅部を検出した。これは南の第9次調査区からの続きで、桁行が4間であったことが本調査によって確認した。

また、調査区中央に石敷が残っている。

B期：東西棟掘立柱建物1棟と石敷がある。溝2は山土などで埋め立てられ、溝3と建物2・3は取り壊されている。

建物1は調査区中央でみつきり、西端は調査区外にある。身舎は、桁行が8間以上（柱間2.1m）・梁行2間（柱間1.6m）で、北側と南側の両面に甬をともなっている。なおこの建物の東側は、第9次調査区でみつかった南北棟建物（SB1515）の東側に柱筋が揃っており、これら2棟が同一の計画のもとに配置されたとみられる。南北棟建物は、第13次調査区には柱穴が及ばないので、南北の桁行が12間と確定した。

石敷は、溝2を埋めたててから上面に拳大の石を敷いている。

遺物

出土遺物には、土器類・瓦類・金属製品・石製品・木製品などがある。土器類では7世紀中頃から8世紀初頭にかけての土師器・須恵器が最も多く、他に銅紋土器・弥生土器が少量ある。この他、土馬・陶硯・墨書土器・箕描土器などがある。瓦類はごく少量である。金属製品には、釘などの鉄製品がある。石製品には、琥珀小片、古墳時代の白玉があり、木製品には、荷札木簡や杓子などがある。この木簡は、溝2を埋めたてた土層から出した石神遺跡で初めて出土した木簡であるが、表面が粗れているため文字の判読は難しい。

おわりに

調査の結果、本調査区において南北を区画する東西方向の石組溝や掘立柱塀の存在を確認した。遺構の重複関係から、本調査区が斉明朝の石神遺跡の北辺にあたり、天武朝にはさらに北に広がる可能性が高まった。

調査成果を列挙すると、以下の通りである。

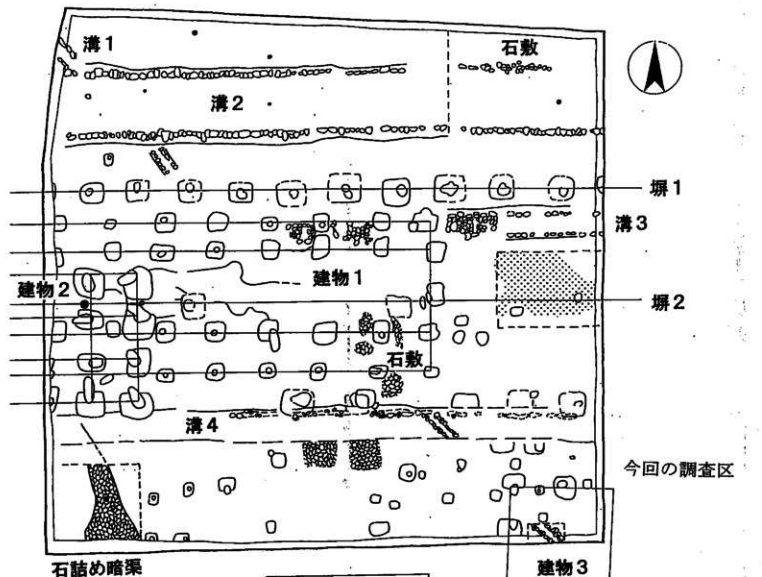
①斉明朝における石神遺跡の北辺の状況が明らかになった。

石神遺跡でこれまでで最大幅の石組溝を外側に配し、内側に塀、さらに内側に小規模な石組溝で構成した。

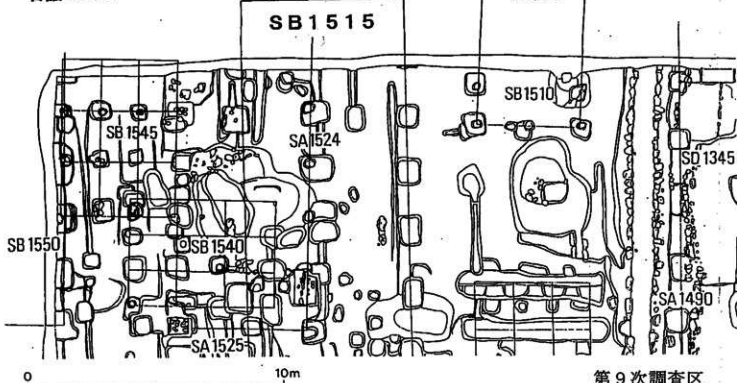
②これまでの調査で、斉明朝A-3期には、それまでの建物を取り壊し、寝堂施設と想定される十字状に長廊状建物で囲んだ大規模な区画を2つ新たに建設したことが判明している。すなわち東西24.7m・南北49.4mの東区画と、東西70.8m・南北107mと推定される西区画である。塀の北への移しかえは、これらの築造に伴うきわめて計画的なものであったと推定される。さらに水落遺跡との間の塀から今回みつかった塀までの南北距離が、約180mであったことが確認した。

③天武朝には、石神遺跡は本調査区の北にも広がっており、大規模な建物を建設するなど、その様相を大きく変えていることが判明した。

今後内と外の実態などを究明するため、周辺におけるさらなる調査の進展が期待される。

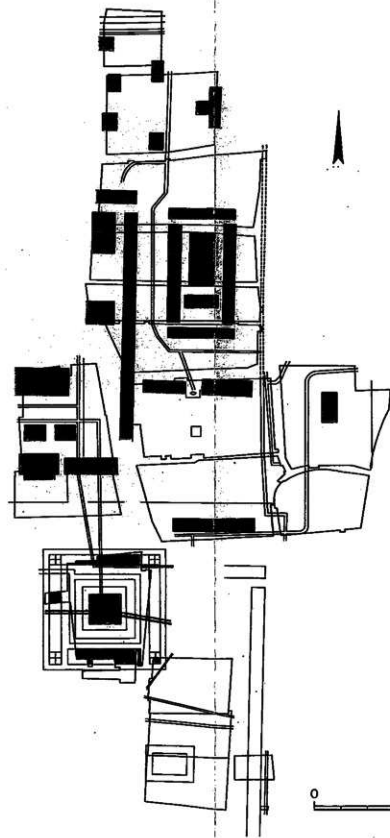


今回の調査区



第9次調査区

遺構略図



A-3期の遺構配置図